

歴史では無数の事件が毎日のように起きる。そのうち、ほとんどは忘れ去られ、歴史の事実として記憶と記録に委ねられるのは少数だ。フランスの古代史家ポール・

ヴェーヌは、歴史とは小説と同じで物事を単純にして1世紀を1分に凝縮してしまうと語ったことがある(『歴史をどう書くか』)。

しかし、米トランプ大統領による12月6日の演説は簡単に忘却や修正のきかない史実としての重みを内外にもち、わずかに数分の演説を1世紀の物語にしかねない衝撃を与えた。この重さを知らないのはトランプ氏自身かもしれない。

「中東和平」調停者の役割失つ

エルサレムをイスラエルの首都として公式に認定し、米大使館をテルアビブから移すという意思表示は、70年来の米国の中東政策の大きな転換点である。首都承認と公館移転の可能性について、私は今夏に佐藤優氏と議論し、その危険性と問題点を予見したことがある(新著『悪の指導者論』参照)。たしかに米国は、国内法の上で1999年までにエルサレムへ大

地政学変えるエルサレム「首都」

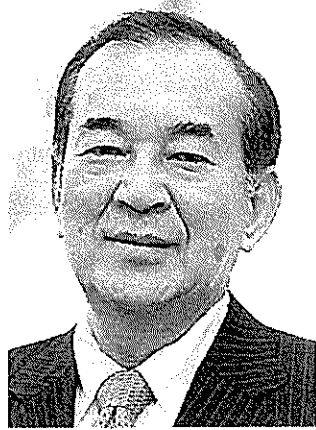
使館を移す義務を負っていたが、歴代政権は安全保障面の理由やアラブ穏健派の国々への配慮から、その実施を延ばしてきた。中東和平の最重要調停者としてイスラエルとパレスチナに橋を懸けられるのは米国だけであり、サウジアラビアやエジプト、ヨルダンを説得してパレスチナ問題を解決できるのも米国のはずであった。

だからこそ、歴代の米大統領は、67年の第3次中東戦争でイスラエルが占領した東エルサレムの扱いに慎重であり、イスラエルとの同盟を維持しながらアラブとの親交を深めるといふ二重外交を続けられたのである。

再びパレスチナ問題が前面に

エルサレムはユダヤ教徒だけでなく、キリスト教徒やイスラム教徒にとっても1000年以上の由緒をもつ重要な聖地である。しかし、トランプ氏がプロテスタント

正論



フジテレビ特任顧問 明治大学特任教授 山内 昌之

の長老派信者なのに、いとまたやすくエルサレムをイスラエルの首都に公式認定したのは、彼のなか

にある「クリスチャン・シオニズム」の思想のせいであろう。

これは、神がユダヤ人にイスラエルという土地を与えたと認める立場であり、ユダヤ人の民族的郷土への帰還運動つまりシオニズムをキリスト教の内部から補強する考えでもある。今回の宣言と公館移転の意思表示は、フリードマン駐イスラエル大使とクシュナー上級顧問(イバンカ氏の夫)の影響

によるものだろう。

しかし、その発表のタイミングはイスラエルのネタニヤフ首相とトランプ氏にとっては絶妙だったかもしれないが、パレスチナ自治政府のアッバス議長やヨルダンのアブドラ国王らにとっては屈辱的な時機以外の何物でもなかった。

2017年は、パレスチナにユダヤ人の民族的郷土の建設を認めたいバルフォア宣言から100年に当たり、国連パレスチナ分割決議から70年を経た節目の年だからである。加えて、東エルサレムやヨ

ルダン川西岸をイスラエル軍に占領された第3次中東戦争から50年でもあった。

この1世紀来、アラブの政治エリートをしたがく民衆はなすところもなく敗退と屈辱を重ねてきた。その挫折感、アフガニスタン、イラク、リビア、イエメンなどでの戦争、アラブの春の頓挫、シリア内戦と大量難民の発生、テロの広域的蔓延によって後景に退いていたパレスチナ問題を、再び中東政治と国際外交の焦点として前面に押し出す要因となる。

利益を受けるロシアとイラン

トランプ氏の不注意な決定は、中東地政学に変動をもたらすだろう。最大の利益を受けるのはロシアとイランである。シリア内戦で「イスラム国」に打撃を与えアサド政権を蘇生させたロシアは米国に対抗できる大国としてアラブ人とムスリムによって認知され、アラブの春を間接的に窒息させた責任は問われずに済むはずだ。プーチン大統領は、中東からウクライナをして極東に至るユーラシア地政学の新たな変動の基本軸

として存在感をますます強めている。トランプ氏のエルサレム発言に楔を打ち込むかのように、ほぼ同時にシリアからのロシア軍撤兵を公言したことは、アラブ人とムスリムの心をとらえる小面憎いほどの演出でもあった。

他方、シリア問題をめぐってスンニ派アラブ人から宗派と民族の両面で反感を買っていたイランは、イスラエルと米国という共通の敵に対峙する存在として、エルサレム問題について頼るべき存在となるかもしれない。まさに「敵の敵は味方」という中東の古典的テーゼが生きているのだ。

「ああエルサレムよ、もし我々んぢをわすれなば、わが右の手にその巧をわすれしめたまへ」(「詩篇」137)とは、長くユダヤ人の祈りの言葉だったが、イスラエル建国以来むしろパレスチナ人のスローガンにもなった(アモス・エロン『エルサレム』)。

トランプ氏の演説は、失われたパレスチナ人の都エルサレムという神話と、彼らの離散と敗北の苦しみをさらに強めるに違いない。

(やまうち まさゆき)